真・恋姫無双　袁の名を持つ武将

XYZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫無双　袁の名を持つ武将

【Ｎコード】
Ｎ６７３２Ｔ

【作者名】
ＸＹＺ

【あらすじ】
前世の記憶をもつ青年、袁遺は仕えるべき主の下で何を成すのか？

序幕（前書き）

処女作、解禁です！

序幕

俺の名前は袁遺（えんい）　字は伯業（はくぎょう）　真名は刀真（とうま）
真名は袁逢様が付けてくださったそうだ。一度拝見したことがあるが、見目麗しき御姿に目を奪われてしまったこともしばしば。更には人柄も良く、公族家（三公を輩出している家）出身ということもあいまって評判は非常に良かった
そして、俺の父である袁平が妹である袁逢様に頼りっぱなしであったために、俺は色々と袁逢様に仕え、お手伝いをしていた
袁逢様のお話は置いておき、俺には周りの人間とは少し違うところがある。それは…

『前世の記憶があること』

小さい頃は少し変な記憶として特に気にも止めなかったのだが、成長し、次第にその記憶がこの時代のものとは明らかに違うことが分かった。きちんと区画整理された居住区に、この時代ではありえないほどに整備された道。夜でも眠ることのないその街では多くの店が遅くまで賑わっていた。そして何より、戦が無い
多くの知識をもった俺にこの記憶がどれだけの意味をもっただろうか？
今の時代では実現不可能なほどに成長した街・国。それはどの国の上に立つものが目指す理想の姿。
そして俺はこの記憶が俺の前世と知る。前世の俺の死の記憶によって

どうやら、前世の俺は年の離れた妹がいたらしい。その妹が鉄の箱にはねられそうになったところを助け、死んだらしい
だが、前世の俺は妹を守れたことで安らかな気持ちになっていたらしい。なぜかそう思った
俺はそのとき決意した。前世の俺のように守るべきものを守れるような男になると。

その日以来、俺は勉学に励み、合間を縫っては自らの体を鍛えた。
小手先の技術よりもまずは基礎から鍛えた
時には袁成様に稽古をつけてもらい、時には、後に『伏竜鳳雛』とまで呼ばれる諸葛亮と鳳統を世に送り出す、水鏡こと司馬徽殿に學について泊りがけで教わりに行った
そのかいあってか、数年後には文武両道を地でいく傑物と呼ばれるまでになっていた

そして、袁逢様のお子がこの世に生まれた。名前は袁術　字は公路
そして、真名は…俺が決めることになった…俺は、美しく華麗に羽化し羽ばたいていくよう願い『美羽』と名付けさせていただいた
この真名は袁逢様や袁術様も喜んでいたようである

その後、すぐに俺の父、袁平が死去、その流れを引き摺るように袁成様、袁逢様が次々と亡くなられた
俺は、父から遺言をもらっていた。そこにはただ一言、『我が妹、袁逢を支えてくれ』と
そして、その袁逢様から俺に遺言があり、そこにもただ一言『美羽を守ってください…今までありがとう』と
俺は、その日だけ泣くに泣いた。そして決めた。俺の命をかけても

袁逢様の言葉を守ると…美羽様を守り通すと

それから五年……女官の手を借りながらも育てた甲斐もあり、優しく清らかな子に育っていった
今は、街の様子を見るついでに兵を二人連れて美羽様と散歩に出かけている

「刀真、あれはなんじゃ？」

「あれは…蜂蜜の入った瓶でございますね」

「はちみつ…？はちみつとはなんじゃ？」

「蜂が花から取って来た蜜ですよ。今では、『養蜂』と言って、蜂を飼って蜂が取ってきた蜜を集めて販売しているのです」

「ほう！手間がかかっておるのう」

俺の中で美羽様は感嘆の声を上げられていた
そして美羽様はこちらをむいてじっと俺を見てくる。どうやら、蜂蜜が御所望らしい

「仕方ありませんね…すみません、この蜂蜜の入った瓶を一つ」

「毎度…おや、袁遺様、それに袁術様も」

「美羽様が初めて見た蜂蜜に興味をもたれたようなのでな…」
「なるほど…ですが、食べすぎにはご注意を。…太ってしまうかもしれませんでな」
「わかりました、わざわざご忠告、痛み入ります」
「いえいえ…では、こちらがご所望の品になります。お納めを」
「うむ、誰かある…これを持て」
俺は付き添いの兵に瓶を持たせ、店主に銭を渡す
「おや？少々、銭が多いようですが…これは…？」
「ちょっとしたお気持ちです…ではこれにて失礼」
「これはどうも…またのお越しをお待ちしています」
俺は美羽様を抱えながら思う。
こんな日がいつまでも続くものだと…そう思っていた
そして、その思いは打ち砕かれる…
袁紹殿の召喚状によって……

序幕（後書き）

所々、史実と違うところがある主人公ですが、生暖かい目で見てやってください

第壱幕

「では…張勲殿…美羽様を頼みます」

「はい、お任せ下さい袁遺さん」

私は美羽様の教育を張勲殿に一旦あずけることにした
従兄妹とはいえ、今は袁家の頭領である袁　本初は俺よりも位が高く、こうやって呼び出されれば素直に向かうしかないのだ。俺は美羽様の周りの人間をすべて信用しているわけではなかった。だから周りの女官も自分で選んだ信用のおける人物のみを揃えた
張勲殿は美羽様がお生まれになった頃から一緒に教育係を務めてきた人物で、美羽様のことを一番に考えている方だ、きっと良きに計らってくれるだろう

そして、今俺は河北にある袁紹殿の城に来ているわけだが…

「無駄に豪華だな…まぁ、袁成様も意外に派手好きだったからな」

そして、玉座の間に通される

「お久しぶりですわね、袁遺さん」

「お久しぶりです、袁紹殿」

玉座の間では、やたらと偉そうに腰をかけている少女がおり、それを挟んで二人の少女が脇に立っている。この無駄に偉そうな方が、俺を召喚した袁　本初。傍らに据えるのは、文醜殿と顔良殿。二人ともそこそこにできる…らしい

「で、今回私を呼び出した用件は何でございましょうか？袁紹殿」

「今回あなたを呼び出したのは他でもありません。私たちの教育係が少々至らなく、逃げ出してしまいましたの」

「…もしかして、その理由は袁紹様の我侭と文醜殿が仕事をしない…といったところですか」

「あら、よくわかりましたわね…まだ言ってませんのに」

「城の中で噂を聞きましたので…誰かというのは本人のために言いませんが」

「まぁっ！見つけ出して御仕置きですわ！」

こんな主だと苦労しそうだ…
袁紹殿の治める河北はなかなかによく治められていた
街の方も豊かで不満の声もなかった。税も特別高いわけでもなく、
そして、なによりそれを実現させる資金の豊富さ、こればかりは簡単に真似はできない

「おほん、それで御相談なんですが、私たちの教育係を務めていただければと…」

「…はっ…？」

よく見れば袁紹殿は見た感じではもう十をとっくに過ぎておられる。そんな方に教育係とは…自分を高めるためか、はたまたそれが当たり前と思っているのか…

「全て面倒を見てくださいとは申しませんわ、それぐらいの節操は弁えているつもりですので」

「…期間はどれぐらいで？」

「六年ですわ！」

「長っ！？」

っと…思わず突っ込んでしまった

たまに、冗談ぽいことにはなぜか無意識に突っ込んでしまう癖がついてしまっていた…これも前世の記憶なのだろうか？

「まぁ、私の教育係を任せられるのですから？是非とも誇りにしていただいて結構ですのよ？」

「あ、教育係はうけますが、誇りにはしませんのであしからず」

「まぁ！随分と自信があるようですわね？」

何の自信ですか、何の…

「ええ、少なくともあなたには負けません」

「あら？生意気ですわね、三国一の名家である私が、あなたのような男に負けるはずがありませんわ！おーっほっほっほ」

…俺も一応は袁家の出なんですが…

まぁ…とりあえず、仕事と節約を覚えさせようか

こうして俺は、これ以上にない最悪の教育係を務めることになった

おまけ

「美羽様～蜂蜜水ですよ～」

「おお！待っておったぞ、七乃」

「これからは私に言ってくだされば
げますからね～」

「さすが七乃じゃの～」

……張勲は立派に（ダメな方に）美羽を育てていた

第弐幕

これまでのあらすじ……袁紹とその部下の教育係になりましたとさ

さて、今日から教育係として袁紹に仕えることになった袁遺です。あらすじが短いといった厨二病な批判は聞き流しますよ？それはさておき、この仕事場での初仕事、気合を入れてやりましょうかね！両手で思い切り玉座の間の扉を開く……が

「…すみません、袁紹殿は…？」

「・・・いつもこの時間は髪のお手入れのお時間ですぞ」

「は、はぁ…」

まぁ、あの髪型を維持するのにはたしかに生半可な時間では無いだろう…

それから一刻ほどたち

「皆さん、お待たせいたしましたわ！」

「え～、では今日のご予定ですが…」

つらつらと並べ立てられる予定の数々。だが、その中には会食などの会合ばかりで政務などはあまり入っていない。

「…以上でございます」

「よろしいですわ、では皆さん、今日も頑張ってくださいまし」

袁紹殿の一言でこの場は解散となった
俺はその場に残って待機していた。どうやら袁紹殿の会合に付き合って欲しいとのことだ
俺としては、不満のある予定だが、決まってしまった予定に今更文句を言うつもりもないので、付き合うことにした

「猪々子さんと斗詩さんはお留守番ですわ」

「ええ！？マジかよ姫」

「私たちがいかなくて大丈夫でしょうか？麗羽様」

「ただの会合ですから大丈夫ですわよ。では行きましょうか、袁遺さん」

「はい。…あ、そうそう文醜殿と顔良殿には部下の方にお仕事をしてもらうよう指示してありますので、帰ってくるまでにすべて片付けておいてくださいね」

「な、なにーっ！？」

「わかりました、袁遺殿」

とりあえず、文醜殿の反応は上々、ここでちゃんとするか、しないかで今後、罰を与えるかどうかを見極めさせていただこう

「では、お二人とも、よろしくお願いしますね」

二人に見送られて俺たちは出発した…
そして、会合に参加した…のだが、これが異常にしんどい。会合と言うからにはゆっくりできるであろうとおもっていたのだが、行く先々で挨拶の連続だった。教育係である以上ぼーっとしているわけにもいかず、同じように頭を下げる
そういえば、一度袁成様、袁逢様の教育係になったことがあると言っていた人の言葉を思い出した

『袁家の教育係になるもんじゃないぞ』

今更、思い出してもしょうがない
だが、袁紹殿は食べるものも食べずに挨拶をしているのを見ては、俺だけしんどいと言うわけにはいかないのだ
こうして、会合は残り一つとなった

「だいぶお疲れのようですわね」

「まさか、あれほどのことをこなされているとは…正直驚きました」

「そうですの、だからわたしは政務などおこなっている暇などないのですわ！」

「それもどうかと思いますが…」

「あら、では私に政務もこなして倒れろとおっしゃいますの？」

「そういうわけではございませんが、ただ、少なからず袁紹殿でないと解決できない案件や袁紹殿の確認が必要なものもありましょう。それを見ていただく時間を少しでも作っていただけると幸いかと」

う～ん…といった表情で悩んでいる袁紹殿。その表情、萌えますよ。…おっと、少し危ない発言をしてしまいました

「それが、袁本初の覇の道を作る近道となりうるのです」

「そ、そういうものですの？」

「はい」

「……では、そうすることにいたしましょう」

よし！俺の初勝利！！！…ついでに追い打ちを

「わかりました。これで民の声をお聴きになれば、より民の心を鷲掴みにできること受け合いです」

「そうですわね！これで私の覇道へまた一歩近づくのですわね！おーっほっほっほ！」

……言っちゃぁ悪いが、扱いやすい方だと思う

そんなこんなしているうちに、最後の会合の場についた。そこは陳留と呼ばれている場所

「あら、ようこそ麗羽さん」

「こんばんわ、華琳さん」

おっと…これはなんと、最後の会合の場は曹操殿がいる場所でしたか。確か、この戦乱を治めることに天命を見出してるとか言っていたな…しかも何をやらせても一流の腕を持つに至るほどに才気煥発な少女だ

「あら…あなた袁遺じゃない？久しぶりね」

「…覚えてくださいましたか、お久しぶりです、曹操殿」

深くおじぎをして曹操殿に挨拶する。実は、一度文献を広めるため、曹操殿の通う私塾に一度お邪魔したことがある。その時に何度かお会いしたことがあるのだ。なぜか同じ私塾にいた袁紹殿は俺に気付かなかったようだが。
そんなに影薄かったかな？

「確か、あなた袁術のところの将でしょ？なんでこんなところでこんな女の付き人なんかやってるの？」

「ええ、袁紹殿に呼び出されてしまいまして、今は部下の将共々袁紹殿の教育係に任命されてしまいまして」

「大変ねぇ…こんな王としての器のない女の教育係なんて…」

「ちょっと、華琳さん！？あまりにも言葉が過ぎますわよ！？」

烈火の如くカンカンに怒った袁紹殿が曹操殿に噛み付きかねない勢いでまくし立てる。が、曹操殿はどこ吹く風のように「はいはい、悪かったわよ」と言って受け流している。それを見た袁紹殿はなぜか悔しがっている

「袁紹殿、少し落ち着いてください。曹操殿もあまり煽られませんよう」

「ふーっ、ふーっ…わ、わかりましたわ、袁遺さん…」

「わかったわ…教育係さん？」

曹操殿の言葉が微妙に気になったが、ここは聞き流しておこう

「麗羽さん、すこし袁遺さんを借りるわよ？」

「…できるだけ早く返してくださいましね」

俺は物かよ

なんて言えるはずも無く、曹操殿に連れられるままについて行った

連れられた先は、夜の空が垣間見える踊り場

「で、私に何か御用でしょうか？」

「ええ、あなたはこの戦乱、どう見ているのかしら？」

「…どう…とは？」

彼女は少し考え込んだ後、口を開いた

「誰がこの戦乱を治め、頂点に立つか」

なんて…答えにくいものを……

「そう…ですね……何人か候補はいるのですがね…例えば既に陳留の刺史になられている曹孟徳殿とか」

「あら、ありがと♪」

「そう言わなければ、首と胴がすっぱり離れてしまいそうで」

「残念、今の私じゃあなたに傷一つ与えられないわ」

（…何を楽しそうに話していらっしゃのですか！？袁遺さんは！）

（なんだ！？あの男は！華琳様に馴れ馴れしく……！）

踊り場の近くにある物陰から覗く二つの影

一人は察しがつくので、ため息をついて、声をかける

「で、そこで何をされているのですか？お二人さん？」

ドキィッ！！？

なんて擬音が聞こえてきそうなほどに狼狽した影が二つ、勢いよく

出てきた

「あ、あなたが帰ってこないと私が帰れないから探していただけですわ！」

「わ、私は華琳様が不逞の輩に襲われないかと、見張っていただけだ！」

まぁ…二人が自信満々にそういうので、そういうことにしておきましょうか

「では、用事も済みましたし、そろそろ帰りましょうか、袁紹殿」

「ええ…さすがに疲れましたわ…では、華琳さん、ごきげんよう」

片手をひらひらさせながら先に歩いていく袁紹殿

「では、曹操殿、私もこれで失礼させていただきます」

「ええ。今度は戦場で…かしらね？」

「はは、どうでしょうか…では」

一礼し、袁紹殿の後に続く俺は、一度振り返り、小さく、宣言した

「曹操殿、私の本懐は、袁術様の覇道とともにありますゆえ…おわすれなきよう」

軽く、笑みを浮かべて会釈しそのままその場を後にした

「あの男…何を戯れたことを…」

「あの男は本気よ…実現できるかどうかは定かではないけど」

曹操は空を見上げて笑みを浮かべる

「彼は私の敵となるか否か…楽しみね」

曹操の目には最早、自らの覇道が見えていた

「華琳さんと何を話していたのですか？袁遺さん？」

「さしたることではありませんよ」

「そう？なら良いのですが」

そんな袁紹殿の不安をよそに俺は明日の教育メニューを考えていた俺なのでしたー

おまけ

「文ちゃん！はやく！」

「待てよ！斗詩ー！」

結局、文醜はサボってしまい、大わらわ
帰ってきた袁遺にこっぴどく叱られたのでしたー

おまけ2

「七乃、蜂蜜水をもってきてたもれ？」

「はいはい、美羽様、ただいま～」

着実に悪くなっていく美羽なのでしたー

第参幕

「で！は！早速ですが、袁紹殿は政務室にて仕事をしていただきます」

「お、お待ちなさい！政務は他の者共にやらせるのではないのですか！？」

「おや？昨日言ったじゃないですか、袁紹殿でなければ解決できない案件や袁紹殿の『確認』が必要な物もあると」

「そ、それは…確かに言いましたが…」

「では、お願いします。昨日、文醜殿と顔良殿が頑張ってくれたおかげで減らすことができたんですから」

そう言い、結構な量の竹簡を机の上にどっさりと置く。かなりの量ではあるが、文醜殿と顔良殿が頑張り、俺も手伝ったので、これでも減ったほうなのだ

「わ、わかりましたわ！名家、袁に二言はありませんわ！」

なんとか、やる気を出していただいた…俺は静かに部屋を出る。あとは真面目に頑張ってくれれば御の字。面倒だとサボれば……お仕置きですから？クフフ…

「では、私たちは何を？」

「今日は書き物しなくていーんだろ？」

扉の外で待機していた顔良殿と文醜殿が訪ねてきた。そう言えば、今日は他の文官の人がやると言っていたな……ふむ、顔良殿は……あれでいいか。でも文醜殿には罰が残ってるしなぁ……よし！

「顔良殿は袁紹殿の補佐についてください。あの量では大変でしょうから、手伝えるなら手伝ってあげてください」

「補佐ですか…わかりました」

「文醜殿は私に付き合ってください。準備に時間がかかりますので一刻ほどしたら呼びに行きますので」

「りょーかーい」

俺は文醜殿と顔良殿と別れた後、謎の準備に取り掛かる。…クフフ、これに喜んで行く人はまずいないでしょうね…。俺はその時の文醜殿の落胆顔を思い浮かべ、一人悦に入っていた…このあとに落胆が待っていることを知らずに

「おおおおおっ！！！」

ここは近くの平野。最近盗賊が現れるとのことで、出陣している。
俺は文醜殿のイヤイヤな表情を楽しみにしていたのだが……

「おらあああっ！てめーら、舐めたマネしてんじゃねーぞ！」

なんとも元気になってしまったのだ。察するに、どうやら昨日、政務にかかりっきりで鬱憤を溜めていたようで、それを今、思い切り爆発させているのだろう
盗賊は暴れまくる文醜殿を恐れて逃げ出す始末だ。だが、逃がしはせん

「盗賊を逃がしてはいけません！このまま前進し、囲んでいくのです！」

丁度、今の陣は『鶴翼』だ。このまま取り囲み、殲滅できそうなのでそうすることにした…少し適当すぎますかね？（笑）
そして、しばらく経てば、盗賊は全て撃退。高らかに勝鬨を上げた

「いやーアニキさー、軍師でも食っていけるんじゃねーの？」

「いえいえ…本職の方には負けますよ……ところでアニキというのは？」

「何となくそう呼びたくなって」

どういう理由ですかそれは…

「それは少しむずがゆいので、真名で呼んでください」

「え？いいのか？」

「はい、これから長い付き合いになるのですからね」

「そりゃそうだ♪」

「ふふ…では、改めて。姓は袁、名は遺、字は伯業、真名は刀真です」

「刀真か、いい真名じゃん！」

「袁逢様に付けていただいたのですよ」

「へぇ～、確か姫の従姉妹の母親だったよな…意外と凄いな？刀真」

「いえいえ…」

「あたいは、姓は文、名は醜、字は無くて、真名は猪々子(いいしぇ)だ」

「なるほど…では、今後ともよろしくお願いしますね、猪々子さん」

俺は盗賊の討伐で少し文醜殿と交友を深めた…のだが

「袁遺さん！いつ猪々子さんに真名を預けたのですか！？」

なんて、仕事を終えた袁紹殿が突っかかってきたのだ

「いいじゃん、姫ー、刀真の真名なんだから本人がいいってんだから」

「そういう問題ではございませんわ！通常ならば先に私に預けるのが筋ではなくて！？」

「たしかにそうですね、ですが確か幼少の頃に預けたと思うのですが？」

……沈黙

「そ、そうでしたかしら！？」

「はい」

顔良殿と文醜殿がジト目で袁紹殿をみる

「まぁ、これからは真名でも字でもお好きな方でお呼びください」

「わかりましたわ。では…私の」

「真名は既に預けさせてもらっておりますので不要です」

「そうでしたかしら？まぁ、これからよろしくお願いしますわね、刀真さん」

「はい、よろしくお願いしますね、麗羽様」

「では、私も預けておきますね、私の真名は斗詩です」

「わかりました、斗詩さん。私も真名を預けておきますんで、お好きに呼んでください」

「はい♪刀真さん」

かくして俺は三人と真名を交換しあったのだった

おまけ

「七乃～蜂蜜水はまだかの？」

「残念ですが、もうお金がないんですよぉ」

「なんと！蜂蜜水が無ければ妾はどうすればよいのじゃ！？」

「でしたら、民の税を上げましょう！そうすれば沢山蜂蜜水が飲めますよ」

「おお～それは良いのじゃ♪早速とりかかるのじゃ」

「はい、美羽様♪」

刀真は無事に人生を全うできるのか！？（笑）

第肆幕

麗羽様のところに来てから今日で七年……

時間が経つのが早いといった質問は受け付けませんよ？いわゆる『ご都合主義』ですから♪

私は最後の仕事をすべく、玉座の間に向かっていた

思えば色んなことがあった

仕事を投げ出す麗羽様に怒ったり

職務中に逃げ出す猪々子さんを叱ったり

うっかり書簡を忘れる斗詩さんに注意したり

馬鹿みたいにお金を散財する麗羽様に呆れたり

賊の討伐中に談笑し、くつろいでいた三人に夜、お仕置きしたり

麗羽様の飽き性に怒ったり……

あれ？なんか…涙が出てきた…

俺は涙を袖で拭い、玉座の間を開けた。

そこには既に、麗羽様と猪々子さんと斗詩さん、それに麗羽様の家

臣の方々が待っていた

「では、今日の…」

「報告です！」

「何ですの！？朝から騒々しい！」

いきなりの闖入客は斗詩さんの部隊の兵士
その姿は焦った感じである、どうやら、火急の用らしい

「ここから五十里離れた村が謎の盗賊に襲撃され、壊滅！今現在、賊は進路をこの城に向け進行中！その数およそ四万！」

この兵士の報告に辺りがどよめく。無理もない、がここで驚いていても何も始まらない

「お静かに願います！…今、出せる最大の戦力は？」

「はっ…およそ六万かと！」

「…出撃準備！数は五万！残り一万はこの街の防衛に回してください」

「はっ！！！」

俺の言葉に兵士が溌溂と応え、玉座の間を出ていく

「では、麗羽様…号令を」

麗羽様は立ち上がり雄々しく号令をかけた

「では皆さん！私の領地で暴れまわる無能な賊共を華麗に叩き潰しますわよ！」

「「「「はっ！！！」」」」

お元気ですね…皆さん

今回は、俺も攻撃に加わりましょうか

場所は移り、街から十里ほどの平野
ここに本陣を敷き、賊の進軍を待っている状況だ
今現在、ほぼ全部隊が魚鱗の陣を敷いている。その中で俺の部隊のみが偃月の陣を敷いている

「では、私の部隊が先陣を切り、賊内部を掻き回します。そしてその間に右翼と左翼から部隊を回り込ませ、取り囲み、これを殲滅させる手筈になっています」

「では、撤退の合図はこちらで知らせますので…」

「わかりました…これでよろしいですか？麗羽様」

「よろしいですわ…まぁ、せめて無様に死ぬようなことはないようお願いしますわね」

「はっ、仰せのままに」

俺は身を翻し、部隊の指示に回る

「麗羽様、すこし言い方がきついのではないですか？」

「そうだぜ、姫。ずっと頑張ってくれてたのにさ～」

「そ、そんなの私の勝手ですわよ！」

麗羽は強がって猪々子と斗詩を叱りつける
今となっては信用できる数少ない家族の一員…できれば死んで欲しくはない
が、こんな大勢の前では恥ずかしくて言えないのが本音だ

「まったく…」

こんな気持ちでは勝てるものも勝てなくなる。麗羽は気持ちを切り替え、前を見据えた

「隊長！」

「…来ましたか」

「はい！」

「では……行きますよ！」

俺の号令を合図に部隊が突撃していく。当然、俺は士気を上げるために一番先を走る

「な、なんだ！？」

「官軍！？…いや騎馬隊だが数がかなり少ねぇ…近くの村の義勇軍か？」

「ははっ、なんてこったねぇ…相手が騎馬隊とは言えこちとら四万だ、そうそう負けるわきゃねぇ！突っ込めええええ！！！」

「「「「「おおおおおおおおおっ！！！！！！」」」」」

そう、彼らは四万。それに比べ刀真の部隊は騎馬隊だが、たかだか隊長を含め五百騎。しかも村の義勇軍と勘違いしている。賊はこの時点で、必ず勝てる、そう思っていた
だが、彼らの思いは完全に無駄になることとなる…

「はあああああっ！！！！！」

俺は一旦、馬から降り敵のど真ん中で槍を振るう。その勢いは軽く十人を吹き飛ばすほどになっていた
…いや、鍛錬ってすごいな…

「ぐわぁっ！？」

「ええい！怯んでんじゃねぇ！」

「だ、だがよ、ひと振りで五、六人斬ってんだぜ！？勝てる訳…ぎゃあああっ！」

「く、くそっ…なんなんだこいつは…！？ま、まるで『飛将軍』じゃねーか！」

なんか、ごちゃごちゃうるさいので槍を左から右に薙ぎ、賊をふ吹き飛ばす。
戦局的には好調な滑り出しである。こちらは損害なし。敵の損害はもうすぐ四千に達そうかというところだ

「はああっ！」

「ぐわああっ！！！」

「ひいいいっ！ぎゃぁっ！」

「いけいけええ！！！」

ちっ…そろそろやべえかな…
敵の損害が七千ほどに対し、こちらは損害が百ほど。戦果としては素晴らしいものだが、このままでは全滅しかねない。合図はまだか…と少し焦燥に駆られた頃

「隊長！」

「どうした！？」

「来ました、銅鑼の音です！」

「来たか！我が部隊はこれより一時退却する！！！この旨を全員に伝えよ！」

「「「はっ！！！！！」」」

俺の号令が轟く中、銅鑼の音を聞いた味方の兵は全員退却していき…

「ちっ…やっと退却しやがったか…」

「頭！俺たち相当やられやしたぜ！どうしやす？」

「決まってんだろ！…奴らの根城の村に…」

「かっ！頭ぁぁぁ！！！」

「どうした！？」

「ぐ、軍が！いつの間にか官軍が取り囲んでやがる！」

「……あいつらぁ…」

そう、包囲が完了し、今まさに突撃せんと麗羽様が手を挙げ…

「突撃ですわ！」

「全軍！突撃いいいいい！！！！！」

「「「「「「おおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！」」」」」」

そのあとは…一言で言えば、蹂躙。賊が殺されるだけの殺戮劇
まあ、囲まれ、逃げ場もなく殺されていくだけの彼らを見て、かわいそうと思わないことも無かったが…自業自得と思うことにしている。そしてそれは俺も同じ、この戦乱が終わるときは、俺も罪を償わなければならない

「まったく……ん？あれは…」

戦場の中で変わった光景を見つけた。官軍でない兵が賊を弓矢で射っている。賊から出たものかと思ったが、どうやら賊とは明らかに雰囲気が違いすぎた。俺は気になって、そこに行ってみることにした

「……」

ビシュッ！

「ギャッ！？」

「あの女、檻から逃げやがった奴だ！捕まえろ！」

「そうはいかないんですね、これが！」

俺は女の子に掴み掛ろうとした男を槍でまっぷたつに斬る。そして、檻を背にして戦う女の子を背にして戦う

「……あの…」

「暫く、援護してください。出来ますか？」

「……わかりました…」

無口なのか、一言二言言った後、援護に回ってくれた

横目で女の子を見る。そして、俺は驚いた。その矢を射る時の正確さといったら、俺など遠く及ばない。しかも矢を番えてから射る速度が以上に早い。

「あなた、すごいですねぇ…どこかの軍に仕えていたことが？」

「……あの…狩り……で…」

マジかよ！！！
……これは失礼…感情が高ぶったりすると、たまに変な言葉を発してしまうようで…。とにかく俺は脱帽した…狩りのみでここまで？…いや、彼女には才能が・・・天賦の才がある、そう感じた

そんなこんなで、賊の討伐は、開始から四刻後に完了した

「麗羽様、ただいま帰還しました」

「お疲れ様です、刀真さん…少々遅かったですわね？」

「賊の死体の火葬に少々手間取りまして…」

「わざわざ、火葬したんですの？…賊如きに？」

「皆、生きとし生けるもの…彼らとて最初から盗賊として生まれたわけではありませんからね…それに、死体を放っておくと……どうなるんですか？麗羽様」

「ええ！？な、なぜ私に聞きますの！？」

「お教え…したはずですが…？」

俺はにっこりと微笑む、が麗羽様は青くなっている。どうやら、いつか受けたお仕置きが、記憶に残っているのでしょう…ですが、こ

こで諦めて教えるほど私は優しくありません…が、あまり時間をかけては話が進みませんね

「…正解は『蛆』が発生します。蛆が発生すればそれはやがて蝿となり、様々な病魔を運びます。しかも、今回の戦闘は街に近かったですからね」

「そ、そうでしたわね…」

「麗羽様、必ず戦闘後の死体の火葬の指示は出してください。きちんと弔ってあげれば民衆の受けが良くなるかもしれませんので」

「わ、わかりましたわ…必ず」

わかっていただけたようで…嬉しいですよ、麗羽様…

「ですが、今日は麗羽様のみ私の部屋においでください…『お話』がありますので」

その言葉を聞いた瞬間、麗羽様はガックリとうなだれてしまった…どうかされたのか？

「……あの…」

「麗羽様！…反応がありません…仕方ないので私がお話を聞きます

ね」

「すみません斗詩さん…この子の部屋をあてがってください…どうやら賊に家族を殺されてしまって身寄りがないようなので…」

「では、詳しい話は明日にして、今日はもう休ませたほうがよさそうですね…では、こちらにどうぞ」

斗詩さんに連れられて、部屋に向かう女の子

「…なんでわざわざ連れ帰ったんだよ、アニキ」

「いや、あの子ね、弓矢の扱いがとんでもなく上手いんですよ」

「あら、どれぐらいかしら？」

「麗羽様なら三秒で討たれますね」

「……」

おや、黙り込んでしまったようで…

「では、私は引継ぎがありますので…何かあれば部屋の方までお願いします」

取り敢えず、引継ぎ作業が残っているので俺は部屋に戻った

「ふぅ…これでいいでしょう」

残っていた引継ぎ作業を終えて、椅子の背もたれに背をあずける
それにしても…麗羽様は本当にお綺麗になられた…最後に会ったのは…十三年も前か…
あの時は俺のことを『兄様』と呼んでいたな…従兄妹だというのに…
袁成様が亡くなった時…皆が泣いている中、麗羽様だけは泣いていなかった
これからのしかかる重責を思えばこそ……泣けなかったのだろう…
言伝に聞いた話では、葬儀の後すぐに政務に追われたらしい

「……大変だったろうに…」

一言、呟いたところで扉の向こうから聞きなれた声が聞こえた

「刀真さん？少しよろしいですか？」

「どうぞ」

扉を開けて入ってきたのは、麗羽様だった

「…二人きりで会うのは十三年ぶりですわね、兄様」

「ぶっ…そ、そうですね…麗羽様」

「もう、二人きりの時は呼び捨てで構いませんわ…」

「わかりました、麗羽」

いきなり兄様と呼ばれて飲みかけた茶を吹きかけた…驚きましたよ

取り敢えず、座っていた椅子を開けて、自分は簡素な椅子に座り直す

「しかし、本当にご立派になられましたねぇ、麗羽」

「当然ですわ」

「まぁ、曹操殿に比べれば…まだまだですが」

「な、なんですって！？」

「最後に会ってから七年。あれから一度だけ遠目で拝見しましたが……相当に力を増しています…」

「そ、それほどまでに…ですの？」

「ええ」

ひと月前、一度陳留に向かい、遠目で曹操殿を見た。覇王としての資質がより顕著に現れていた。政治や戦闘を見ていないので詳しくはわからないが、ただ…ああいう人物には有能な人物がよく集まる

「……では…ここに…残って下さいませんこと…？兄様」

「…やれやれ……私がどう答えるのかわかってて聞いているんですか？麗羽」

「やはり…残ってはいただけないのですね…」

「……こればかりは…」

軽く頭を下げると、それを制止させるように肩に手をやる麗羽

「構いませんわ…いずれ、美羽さん達ごと引き抜いてみせますわ！」

「それはまた…ですが、簡単にはいきませんよ？」

「望むところですわ」

「…ハハッ」

「ふふふ…」

どちらからともなく笑みを浮かべる
やはり、変わられたな、そう思う今日このごろだった

「そろそろ、ご就寝の時間ですね」

「…そのようですわね」

と言いながら動かない麗羽嬢…どうかしたのだろうか？

「…麗羽…？そろそろ…」

「…最後に、兄様の隣で寝かせてくださいませ」

……え？

俺は従姉妹のこの言葉に固まってしまった。あたりまえだ、一回り近く年の離れた従兄妹にそう言われては固まるしかあるまい。……

とはいえ、何か答えねば話は進まない…困ったな…

「……それは、麗羽が好きな男にしてあげたほうがよろしい…かと…」

「…お断りしますわ、私は面食いですから、並みの男では満足できませんの」

「……はぁ、全く…仕方ないですね…」

観念したため息か、呆れたためのため息かどちらかわからないため息をついて、俺は布団に潜り込む。そして続くように麗羽嬢が入ってきた…あまり、女性と密着するのは苦手なんですがね…

「では、麗羽…おやすみ……」

「兄様」

呼ばれて目を開けば麗羽の顔が間近にあった、俺は思わず…見とれてしまった

「……どうしても、ですか？」

「は、はい…」

恥ずかしそうにうつむく麗羽。ここでその表情は反則ですよ…

「わかりました」

優しく頭を撫でて、抱き寄せる
その行為にすら小さく声を上げる麗羽が可愛く見える

そして、二人はいい知れぬ高みへと登ったのであった…

空がまだ白む朝、俺は目を覚ます。隣には少女から大人になった従

兄妹が眠っている

今日は…出発の日……

第伍幕（前書き）

ご感想、ありがとうございます！
小説ってすごく難しい…やっててまざまざと感じてます（つд⊂）
ただ、そんな中、感想や、ご意見をいただけるのはひっじょーに嬉しいです
これからも温い目で監視してください（監視てｗｗｗ）

第伍幕

朝、出発の日

俺は麗羽を彼女の部屋に移動させ、俺は出立の準備を始める
…と言ってもそんなに多いわけではないので手荷物が一つ、槍、剣、弓矢だけ

「いつもの朝か」

だが、俺にとってはいつもとは違う朝
…そろそろ行こうか

俺は玉座の間の扉を開いた……が、そこに居たのはいつもの面子と
…一人の盗賊らしき男

「麗羽様、この男は？」

「この間討伐した盗賊の一味の一人ですわ」

「おや…全員殺したと思いましたが…運良く生き残りましたか」

「ま、こんなところに引っ張り出されちゃ…死んだも当然だけどな〜」

そんな猪々子さんの言葉は正しい
だが、何故いまこの時に捕まったのか…？

「え〜…この男は、逃げた後に近くの村で盗賊行為を働こうとし、村の男衆に捕まってここに連行されたということです」

……なんとも…呆れたことだ

「…で、どうしましょうか？刀真さん？このまま、さっさと首を刎ますか？」

「それは少し待ってください、斗詩さん…せめてどこから来たのか…教えて貰いませんとね」

俺はしゃがみこみ、盗賊に優しく問いかける

「では、教えていただきましょうか。どこから来たのかを…」

「はっ！何でそんなこと教えなきゃなんねーんだよ！」

「おや…ではこういうのはどうでしょうか。答えていただければ…無罪放免で解き放つと」

「なっ！？」

「……へぇ…」

俺の突飛な発言に、麗羽様や周りの方々は非常に驚かれた。まぁ…俺でも驚きますよ、普通はね

「で、いかがですか？」

「そうまで言われちゃあ、答えるしかねーわな……河南から来たんだよ」

……な…んだと？

「あそこ治めてる奴が無能なんでよ、どいつもこいつも金がねーわ食いもんねーわでこっちに流れてきたってわけよ」

「…そうですか」

「話したんだからもういいだろ？」

「そうですね、縄を解いてあげてください」

「し、しかし…」

「構いません」

盗賊の縄を解き始める兵士、だがその視線は疑問に満ちているように見えた
盗賊は縄で縛られていた体を伸ばすように背伸びし、何回か首を回す、相当お疲れのようだ

「では、もう行っていいですよ…そうだ、門までお送りしましょう」

「へっ…悪いねぇ…では袁本初様、ごきげんよう」

恭しく一礼する盗賊。だがそれは他人から見れば、明らかに小馬鹿にされているとしか思えないだろう…
盗賊はそのまま振り返り歩き出す。そして俺もそのあとを付いていく

「ちょっと！刀真さん！？あなた何を……！？」

「大丈夫ですよ、麗羽様」

「っ……！？」

俺はにっこり微笑んだはずなんですが、麗羽様はひどく怯えていま

したね…なぜでしょう？
さ、私はこの盗賊さんをお送りしなければね

「～♪～♪」

さて、これからどうするかねぇ…
せっかく拾った命だ、大事にしねーとな
俺は今、袁紹の城の門のところにいる。先の戦闘で生き延びたはいいが、少し食いもんを拝借しようとしたら捕まっちまった。ついてねーったらありゃしねえ…ま、でもどこから来たか答えただけで無罪放免たぁ、あの男、何考えてんのか分かりゃしねえ。
まぁ、あの袁紹の部下なら…バカってこともありえる…っ…！？

俺が次の一歩を踏み出す…その瞬間、壁が目の前に広がった…なんだ、これは？
妖術…なわけねえ。ここにそんな野郎はいなかった…ならなんだ？
そう…俺は気づくべきだった…

『門までお送りしましょう』

この言葉を断るべきだったと
そう、目の前にあったのは壁ではなく、地面
俺は、足首の腱を切られ、倒れていたのだ
そう…門まで送るといった男に

「さて……」

今、俺は足の腱を切られ無様に地面に横たわっている盗賊を見下げています。その表情は自分でもわかるぐらい冷たいもの…なのでしょう

「申し訳ありませんが…あなたにはここで死んでいただきます」

「なっ…なんでだよ！？言ったじゃねーかよ、ちゃんと、河南から来たって！もちろん嘘なんかじゃねぇ！言ったら開放してくれるってあんたも言ったじゃねーかよ！」

「ええ、だから『開放』して差し上げたじゃないですか…その後の事までは私は何も言ってませんよ？」

「そ…そんなっ…！？」

「河南から来た…と言いましたが、その時点で嘘であろうと真であろうと…この世に存在させる理由がないのですよ…では、そろそろ『逝き』ましょうか」

「こ…この嘘つき野郎が！」

「嘘はいってませんよ…ちゃんとお送りしたでしょ？…地獄の門まで」

俺は笑顔で首を刎ねた

「…おや？」

転がった頭を見れば、額に深々と刺さる矢。上を見上げると、昨日連れ帰ってきた子がこちらを見ていた

「余計な手間…でしたかね？誰かここに！」

「はっ！」

「この死体の火葬と埋葬、それとここの掃除をお願いします」

「了解です！」

さ、戻りましょうか…玉座の間に

「あら、ずいぶんと掛かりましたのね？刀真さん」

「いえ、なかなか門が開いてくれなくて…」

「はぁ？門なら開いて…」

「いえ、そちらではなく…冥界の門ですよ。あの男の首を刎ねたらやっと開きましたよ」

「そ、そう…ですか……」

おっと…いけませんね。麗羽様が怯える姿も大変可愛らしく、萌えてしまうのですが、ここは抑えないと

「んんっ…ではそろそろ、私は河南の方に帰郷しますので……」

「……刀真さん」

「はい？」

「あまり無理をなさらぬよう、お気を付けくださいな」

「有難うございます、麗羽様」

「……あの…いいでしょうか？」

振り向くと、身支度を整えた女の子が一人立っていた。どうやら昨日の子だ

「……私も…ついていって……いいでしょうか…？」

「…出来れば、ここで何不自由なく暮らして欲しかったのですがねえ…」

「刀真さん、連れていって差し上げなさいな」

「いや…ですが…」

「本人が行きたいと言っているんですから…連れていきなさい、刀真さん」

「……頑固なところは母親そっくりだ…はぁ、わかりました…連れていきます」

「よろしい」

ま、一人増えたところで困る旅でもないか

「おっと、ではそろそろ失礼させていただきます」

「また、いずれ戦場で…兄様」

「またなーアニキ！」

「お体に気をつけて下さいねー刀真さん」

こうして、七年にわたる麗羽様の教育係を無事終えた

「……まずは…どこに行きますか？主様」

「私はあなたの主になった覚えはないのですが…」

「……」

彼女は立ち止まってじーっと見てくる……はぁ、まったく

「わかりましたよ…主になってあげますから」

「……ありがとうございます」

相変わらずの無表情だが、声色は嬉しそうなので良しとしましょう
…と、その前に

「あなたのお名前を教えてもらってないですね」

「……黄　月英……真名は…ありません」

「では、真名は帰ってから考えましょうか」

「……付けて…くれるのですか…？」

「ええ、あったほうがいいかと思いまして」

「ありがとう…ございます……」

深々とお辞儀をする月英
わざわざ御礼を言われることではないんですがね…ま、いいでしょう

「さ、行きますよ」

「はい…主様」

こうして、俺たちは一路、美羽様の城に向かい、出発した

おまけ

「そう言えば、今日袁遺さんが帰ってくるそうですよ」

「おお、刀真がかえ？また楽しくなるのう！」

「はい♪」

ま、しばらくしたら楽もできないですがねw

第伍幕（後書き）

三国無双で有名な月英さんをいじって登場させました～
性格のモデルは…ご想像ください

第陸幕（前書き）

一言。孫堅は生きてるぞー！（蒲公英風味で）

第陸幕

こんばんわ。俺の名前は袁遺といいます。横の少女は月英。隠れた弓の名手です
今俺たちがいるのは陳留近くの街道を歩いています。今日中に荊州の南陽に着くはずが、なぜか小さい集団に三回ほど襲われてしまったのだ。なぜかそいつらは『黄巾党』と名乗っており、体の一部に黄色の布を身に付けていた
とりあえず、通行人を襲う時点でろくな人間ではないので、集団を殲滅し、火葬し、埋めた。まぁ、律儀に燃やして、埋めていたらこんな時間になってしまったのだ

「申し訳ありませんね、こんな時間になってしまいました」

「いえ……主様は、悪くありませんから」

その気遣い、ものすごく嬉しい……のですが、少しは表情を出してください、月英

「…仕方ありません、今日は陳留で宿を取りましょう」

「わかりました、主様」

俺たちは暗い街道を駆けていき、陳留に向かった

「はい、お二人様ですね。お部屋は上の階にになります」

「わかりました、行きましょうか…月英」

「はい、主様」

階段を上り、部屋に入る。内装は至って単調に木の造りだが、なかなか味を出しているとおもう
荷物を下ろし、床に腰を下ろす…と、なにやらどたどたと外が騒がしくなり…扉が勢いよく開けられる。そして兵士が俺たち二人を取り囲む

「動くなよ…袁伯業！」

「あなたは……夏侯元譲殿」

「ふん…偵察か何かなのだろうが…私の目はごまかされんぞ！」

…これは…どうやら勘違いをしているようですね…なんとか説得しなければ

「いや、あのですね…私達は荊州に帰る途中でして…」

「言い訳は無用！…抵抗するなら…わかっているな？」

…こちらは二人…俺だけなら切り抜けることも可能だが、月英を置いていくわけにはいかない

「主様…」

「仕方ありません…ここは大人しくしていましょう」

「はい」

こうして俺たちは、帰る前に面倒ごとに巻き込まれた

「華琳様！」

「どうしたの？こんな夜遅くに…」

華琳は些か、ご立腹である…こんな夜遅くに起こされては華琳ならずとも不機嫌になるものだ

「はっ！袁紹の間諜を発見いたしました！」

「あら、珍しいわね…あのおバカ娘が間諜なんて…連れてきなさい」

「はっ！」

そして、夏侯惇が連れてきたのは……

「…袁遺さん？」

「はは、どうも…」

「まさか…本当に間諜を？」

「実はですね……里帰りの途中だったのですが、見事捕まってしまいまして…」

「春蘭……？」

ぴくぴくと目尻が引き攣っている。どうも、かなりご立腹である

「これで麗羽さんと戦う羽目になったら、春蘭一人で行きなさいよね」

「そ、そんなぁ、華琳様〜」

「ま、春蘭は放っておいて…取り敢えず部屋は用意させるわ、今日は泊まっていきなさい」

「有難うございます…出来れば宿の方も立て替えていただけると嬉しいのですが」

「春蘭の給金から差し引くわ」

…夏侯惇殿も大変だな…。ま、自業自得ですが

「では、夜も遅いので…俺たちは休ませてもらっても？」

「わかったわ。では私も休むから…明日ここを出るときは顔を見せなさい」

「はっ」

終始、俺しかしゃべらなかったが……まぁ、いいでしょう

そして、俺たちは部屋に案内されて…床に着いた

ん…ここは…？
あたりは何もない灰色一色の世界。暑さも寒さも感じない…おかしな世界
と、不意に上に何かが映し出された。妖術か何かと思ったが…どうも違う
そこには、何か雑誌を読む男が一人。顔は見えない…というかこの男の視点だ
何を見ているのか気になったので見てみると、麦わら帽子をかぶった少年が海賊になって冒険する話や、黒い着物を来た少年が化け物と戦う話など…様々な話が載っている。しかも絵付きで

「まさか…これは俺の前世の記憶…なのでしょうね」

俺の前世の男がそれを読み終わる。その雑誌にはでかでかと文字が書かれている…そして俺はそれを読めるようだ

「……ジャン…プ…？」

さっぱり意味が分からない…

…未来にはいろいろな娯楽があるものだ…
そう感想を残し、俺の意識は闇に落ちた

「……ん…」

俺は、ゆっくりと目を開く…そして意識を覚醒させていき、体を起こす

「おはようございます、主様」

「うわっ！…月英でしたか」

そばに月英がいたので変な声が出てしまった…はぁ、恥ずかしいですね

「曹操様がお呼びですので…そろそろ起きてください」

「わかりました」

俺は手早く支度を済ませ、曹操殿の待つ玉座の間に向かった

「おはよう、よく眠れたかしら？」

「はい、わざわざありがとうございました」

「構わないわ……」

じっと俺を見る曹操殿…なんでしょうかね？

「あなた、うちに来ない？」

「…わかってて言ってますか？それ」

「もちろん♪」

「無理ですよ…袁紹殿にも言いましたが、私を仲間にしたければ美羽様達ごと受け入れる覚悟で来てくださいね？」

「…惜しいわねぇ…袁術程度の下に従いているのが不思議なぐらいの文武を持っているのに」

「こればかりは…申し訳ないですね」

「これだけは言っておくわ…必ず、私のもとに迎えるわよ」

「肝に銘じておきましょう…では、私はそろそろ…」

「あら…そう？…じゃぁ、また戦場で会いましょう」

「ええ…また、お会いしましょう」

一度、頭を下げ、踵を返して玉座の間を出る

「華琳様…あの男、そこまでして手に入れる必要があるのですか？」

「そうですよ！あんな男…必要ありません！」

「……ふふ…それも……そうね」

だが、華琳は感じていた。刀真からにじみ出る王としての資質を、
いずれ引き込まなければ最大の敵となりうることを
いつか必ず我が配下に…そう思わざるを得ない華琳だった

「では、月英…行きましょうか」

「はい、主様」

二人は再び、荊州に向かい、歩を進めた

そこで、見るかつての街の惨劇を知る由もなく…

第漆幕（前書き）

袁遺はゴム人間にはなりません。怪しい人になっちゃいますｗｗｗ
まぁ、使えても氣ぐらいでしょうね。霊圧は使えませんｗｗｗｗ

第漆幕

日が一番高く上がる頃、袁遺と月英は荊州は南陽にある袁術の城がある街に到着した
だが、街は昔の栄華の欠片もなく、街は廃れていた…街に人は居ない…まさに現代のゴーストタウンだった

「こ……これは…」

「誰もいませんね…」

確かに、ここに来るまでの美羽様の評判はお世辞にもいいとは言えないものだったが…まさか、街が廃れていようとは……俺は暫く街の中を歩く。どうやら人の気配はするが、怯えて出てこないのだろうか？
一応、警戒しながら歩いていると、武装した街の人に囲まれた。最近、よく囲まれますねぇ

「お前ら！こんなところに何の用だ！？」

「何の用って…久しぶりに帰ってきてそう言われるとは思ってもみ

なかったですよ…」

「うるさい！やっちまえ！」

えええ！？困りましたね…はぁ、仕方ありませんね

「月英はそこでおとなしくしててください」

「了解しました」

俺は月英に待機を命じ、襲いかかってくる街の人たちを黙らせていく。あ、もちろん黙らせると言っても気絶させるだけですよ？わざわざ、我が街を血に染めたりはしません

「まったく…あなたがたは街に人が来るたびに問答無用で襲いかかっているのですか？」

「はぁ？んなわけねーだろ！」

「ほう！では私たちが受けているこれはなんでしょうかね？どう見ても一方的な攻撃ですが？」

「お前らが怪しいからだろうが！」

「訳も聞かずに怪しいと決めつけるのがこの街の習わしなのですか？」

「くっ…ごちゃごちゃと！」

最後の一人が俺に飛びかかろうとしたとき、それは思わぬ乱入者の声で止められる

「止めんか！このバカタレ共が！」

「なっ…親父！？」

「すみません…うちの息子がとんだ御無礼を…」

「お気になさらずに。……おや？あなたは蜂蜜屋の店主では？」

「覚えておいででしたか、袁遺様」

どうやら、この街の人間は、蜂蜜屋の店主の息子を中心に若者で自警団を結成し街を守っていたとのこと…ただ、最近は少し暴走気味だったようで…

「で…この街の荒廃ぶりが非常に気になるのですが…何が？」

「はぁ…実は…」

この蜂蜜屋の店主の話によると、俺がこの街から居なくなってすぐ

はどうもなかったらしいのだが、ある日を境に蜂蜜を大量に買い込んでいった。まぁ、それだけなら別にどうもしない。逆に蜂蜜が売れて儲かっているのだから。
だが、ここからがえげつなかったようで、大量に買いに来る頻度が半端なく、すぐに在庫切れになってしまい…挙句の果てに…

『蜂蜜が無いなら、ここは用済みですね』

と言われたそうだ。自ら美羽様の側近と名乗っていたらしいから、おそらくは張勲でしょう…まったく何をやっているのか…。その後、金がなくなったのかは知らないが、民の税をものすごく上げて搾り取っていったそうだ。しかも、多数の貴族や役人から賄賂を受け取り、城で好き放題させているらしい

「……」

「袁遺様、何分勝手な申し出ではありますが、私たちを…この街を救ってはもらえませんか？」

蜂蜜屋の店主を筆頭に皆が頭を下げる…今まで耐えてきたのだろうか、皆一様にやせ細っている

「私は、私の出来ることしかしません」

「袁遺様…」

「この街を踏み荒らす者は、俺が殺す。行くぞ、月英」

「はい、主様」

俺たちは、呆然とする街の人たちを尻目にこの街とは裏腹なほどに煌びやかになっている城に向かった

「貴様！ここを袁術様の城だ、何用か？」

「袁術様の従兄妹、袁伯業だ。只今、帰還した」

「え、袁遺様！？ご、ご無礼、申し訳ありません！」

「お気になさらず」

俺は、一目散に玉座の間に向かった

「袁術様！」

「何じゃ？何か起こったのか？」

「袁遺様がこちらにご到着された模様で…」

「報告ありがとうございます…ですが、もう結構ですよ」

俺が入ってくると、その姿に袁術様…『美羽様』は大喜びする
昔のことを覚えているのか、無邪気にその笑顔を向けてくる…が、
今の俺の表情を見てその笑顔を曇らせる
それもそうだ。今俺は真剣な表情なのだからな

「よ、よく戻ってくれたの。で、どうじゃった？妾の子の教育係は」

「なかなかに、大変でございましたよ…で私もお聞きしたいのですが？」

「何じゃ？何でも聞いてたも？」

「ここの街の民が苦しんでおられるのは、何故でございましょうか？」

「うぐ…そ、それはじゃのう…」

言いにくいのか、もじもじとしながら視線を泳がせている。まぁ、原因はわかっているのだが

「まずは、民の税…ではないですか？」

「ギクッ！」

わざわざ口で言わなくても…まったく

「美羽様は蜂蜜水を欲するあまりに、城のお金を使い果たしてしまった…そこで美羽様は民の税を上げることによってお金を得ようとした……違いますか？」

「うう…七乃にそうすればよいと言われたのじゃ…」

「ほう…？」

じろりと七乃…張勲殿を見ると、美羽様の椅子の後ろに体を隠してしまった。というか、椅子も豪華でデカイな…

「そして、更に金を得んとし、政務のせの字も知らない役人や、遊び呆ける貴族から多額の賄賂を受け取っていたのもこの街の荒廃の元凶ではありませんか？」

「う…」

「そしてこれも張勲殿差し金……ですかな？」

じろりともうひと睨み。覗いていた張勲殿が怯えて頭を引っ込める

「……はぁ…全く、俺が居ない間によくもまぁここまで…」

無能な役人や貴族共に思い出の場所をこれ以上汚されてたまるか。取り敢えず、税はさっさと下げて、無能な豚共を一層しなければ……んんっ、少々言葉が過ぎましたか

「では、美羽様、税は即刻元に戻しますが、よろしいですか？」

「い、いきなり戻すのかえ！？それでは蜂蜜水が飲めなくなるのじゃ…」

「そ、そうですよ！袁遺さん、いきなり戻すのはどうかと思います

！」

二人がぎゃーぎゃーと騒ぎ立てているのを見て兵士の皆さんの呆れ果てています…全く、お二人は後で御仕置きですね…俺は今一度、美羽様に近づき、殺気を含みながら言い放った

「税は今すぐ下げます。よ・ろ・し・い・で・す・ね！？」

「わわわ…わかったのじゃ」

ああ…その怯えた表情…堪りませんねぇ……っと、悦に入っている場合じゃないですね

「ではこれから、少々準備がありますので…『大人しく』しててくださいね？」

にっこり笑みを浮かべてお願いした…のだが、なぜか二人は怯えている…失敬ですねぇ全く

さて…どうやって追い出すか…

「袁遺様」

考え事の途中に声をかけられ、振り向くとそこにはひとりの女官が

立っていた

「おや、あなたは…」

「はい、静音(しずね)です」

静音さんは七年前に美羽様付の女官だった女性で、今は女官長だ

「…で、私に何か？」

「はい、こちらをお渡ししたくて」

と、渡されたのはひとつの書簡。中を見てみると、賄賂をを渡した役人、貴族の名前がびっしりと書き記されていた

「ほほう…これは…」

「……金…千……すごい」

「おそらく、いま袁術様の保管庫には金十万ほどが眠っているかと…」

この子…女官より間諜に向いているのでは？思わずそう思ってしまうほどに手際のよい仕事振りですね

「…では、明日、ここから消えていただきましょうか…クク」

その日、城に悪魔の笑い声が聞こえたとか聞こえなかったとか

翌日

玉座の間には、国に賄賂を渡した役人や貴族…百名が集まっていた。
そして、彼らが聞いたのは、この荊州からの即刻退去だった

「どういうことですか！これは！」

「我らは袁術様にこの身を捧げ仕えているのですぞ！」

「だが、金を私、好き勝手に政を行っていたのは事実でしょう？そして、まず考えるべきは美羽様ではなく民！それを蔑ろにして、何を言うんですか？」

「黙れ！入ってきたばかりの新参者が！」

「貴様にこの街の何がわかるか！」

…何だと？

「貴様等…いい加減にしろよ」

俺はいい加減に我慢の限界を超えてしまった。殺気を飛ばしながら前に歩み寄る。その姿に皆怯えている

「ここは俺が物心着く頃から袁逢様に仕えてきた城だ。貴様らが入る余地などないのだ！全員…」

次の言葉を発しようとしたとき、玉座の間に覆面を被った数人の男が入ってきた

その男たちは、剣を振りかざし、その場にいた貴族や役人を斬り始めた

「な、なんだ！？きさま…ぎゃぁぁっ！？」

「や、やめてくれ…や、やめっ…！ぐぼぁ！」

「ちっ！」

俺は剣を振りかざす男に槍を突き、牽制する
その男は一旦下がるも、ほかの男が貴族たちを殺していく

「貴様等！」

「……ぐっ…！」

俺は、男を一人、沈黙させるも、既に貴族、役人は全員殺され、男たちは早々に逃げていった

「袁遺様！すぐに追跡を開始します！」

「いえ…大丈夫です。犯人は分かっています」

「おお！さすが袁遺様！」

俺は、気絶させた男の覆面を剥ぐ

「こ、この男は、我が軍の兵士！」

「そういうことです。恐らくは、余りにも怠慢な貴族や役人に我慢ができなかったのでしょう」

「なるほど…では、残りの者共も…」

「ええ。ですから、彼が目覚めたら残りの実行犯の居場所を聞き出してください、出来るだけ相手を刺激せずにお願いしますね」

「はっ！」

数人の兵士が、玉座の間を立ち去り、残りの兵士に玉座の間に転がる死体の処理と、清掃を命じ残りの話はまた明日にすることにした

おまけ

「七乃～、蜂蜜水が飲みたいのじゃ」

「あの～…袁遺さんに全部取り上げられちゃいましたー」

「なんじゃと～！！？」

哀れ…

第漆幕（後書き）

微妙に進んでないｗｗｗｗｗｗ

第捌幕（前書き）

よし！アンチ一刀にしよう！（いきなりw

感想、毎度どうもです！

陳留の一件はまぁ、二人しか知らないということと袁遺が案外、美羽様関係以外ではそこまで怒らない（例外あり）ので、あれだけで済みました

第捌幕

「……参りましたね」

本当は出ていってもらうつもりだったのだが、早まった我が軍の兵士が身分を隠し貴族共を全員粛正してしまった。…とは言うものの、彼らの言い分もわからなくもない。

『我々の城があのような輩に踏み荒らされているのが我慢ならなかった』

だそうだ。俺もそう思っていたので、複雑な心境だ…そして、さらに問題は元凶が張勲殿ということだ。

「ああっ！もう！あの人は…何をやっているんでしょうかね」

俺は正直どうするか迷っている。兵士や昔を知る方からは『是非極刑を！』と言われ、一部の張勲派と美羽様からは『寛大な処置を！』と言われてしまったのだ。普通なら極刑だが…むぅ、本当に参りましたねぇ

「主様…少しいいですか…？」

「…なんですか？月英」

「あの……張勲様のことで…」

「極刑はやめて欲しい…ですか？」

「…はい…せめて何か罰でいいと思います…」

「しかし…う～む」

やはりそれでは、納得しない方々もいるだろう…本当に困りました…

翌日

結局、今だ結論が出せずに、今日も皆が玉座の間に集まっている
今はこの間の襲撃犯の兵士の処罰の件と張勲殿の査問会の件で集まっている。

「では、今回の貴族・役人襲撃事件の首謀者の処遇についてですが…」

「…まぁ…今回は少々行き過ぎだが、極刑までいかずとも良いのでは？」

「そうですな…だが、生きているとわかればどこからか袁紹殿の間諜が聞きつけてねちねちと言われそうだぞ…どうすればよいですかな？」

「…死んだ事にしましょう…そして、普段は間諜、戦では兵士として活かせばよろしいかと」

「…ならば、そうすることにしましょう…取り敢えずは形として一ヶ月牢屋に入ってもらうことになるが…」

「ま、身を隠すためにも…我慢していただきましょう」

襲撃犯の兵士たちは一ヶ月牢屋に入れられることになった。その後は間諜及び兵士として働くことになる。そして……問題の張勲殿の処遇だ

「私は極刑に処すべきかと。金に目がくらみ必要のない者共を招き入れ、自らは政を蔑ろにし国を荒廃させていることは明々白々であるからして、極刑を求めます」

白髪の老将の意見に頷くものは多数いた。この人は袁逢様のころから袁家に仕えている方、やはりこの街、この国を荒らされて憤慨しているようだ

「私は極刑でなくともよいかと思います。確かに来度の賄賂事件は目に余るものがありますが、極刑が必ずしも当てはまるとは思えません。例えば、監視の上でこの国の再建・発展に尽力させるべきです」

という女性は、私がここを出てからこの国に入ってきた方。昔、袁逢様にいろいろ助けていただいたらしく、その恩を返すべく、文官としてこの城で務めている。張勲殿の行為に憤慨しているものの、まず第一に国のこと、民のことを第一に考えている女性だ

「…袁遺殿…どうされますか？」

この城で働いている皆が注目する俺の発言。この話し合いが始まる前に俺の出した結論に皆、従うと言うことは聞いていた。……よし

「私は…この度の張勲殿の行為に非常に憤慨しました。この行為が、この国の荒廃の元凶であることは、事実。……ですが皆さん良いのですか？このまま死なせても。国の再建をさせずに死なせても。それは否。きっちり奉仕させ、それから死んでいただく…私はそう思います。…この意見に賛成できない方がいれば…挙手をお願いします」

そう、ただ死なれては…やるだけやって逃げていく…勝ち逃げのようなものだ。どうせ死ぬならこの国を元に戻してからでも遅くない。そう俺は判断した。そしてこの俺の意見に反対するものはいなかった。

「では、張勲殿はこの国の再建を果たした後、極刑に処す…ということで決定します」

こうして、この件は一応の決着を見た

「よ、よかったのじゃぁ、七乃〜」

「美羽様…有難うございますぅ」

二人は美羽の部屋で抱き合って泣いていた。一時は死ぬか生きるかの瀬戸際だったのだ。無理もない。

「すみません、美羽様…居られますか？」

扉のむこうから、袁遺の声が聞こえ、ビクッと体を震わせる美羽と七乃

「は、はいってもよいぞ」

美羽の許可を得て、開かれる扉。その向こうには袁遺が立っていた

その表情は幾分硬く、美羽の足元でかしづく

「…少し、お話をよろしいでしょうか？」

「な、何の話じゃ？あまり難しい話は…お断りじゃぞ？」

「はっ、申し訳ありませんがこれから先、美羽様には私がもう一度教育係として付かせていただきます」

「…どういうことなのじゃ？」

「美羽様は、ご無礼を承知で申しますが、あまり聡明ではございません…ですので、一般的な教養を身に付けていただくまで、私が教育係として面倒を見させていただきます」

「そ、そうか…わかったのじゃ…」

「張勲殿は貢献次第ではお咎め無しも考えておきます」

「ほ、ほんとうですか！？」

「ただし！ちゃんとやってくださいね？…せっかくあなたを庇ってくれた方もいるんですから」

「はい！誠心誠意、頑張らせていただきます！」

…この人ほど誠心誠意が似合わない方は居ないですが…まぁ、今回は信じましょうか

「ですが……一度私に反抗したので、御仕置きは受けていただきます」

「「ええ～っ！？」」

その後、何処からともなく謝る声と、艶っぽい声が城に小さく響き渡ったのだった

第捌幕（後書き）

月英、出番なし…矢で撃たれそうw

結局、張勲は死にませんでしたね…袁遺さんも甘いのですよ

第玖幕

「さて……」

俺は今、自分の部屋で書簡・竹簡の山と戦っている
取り敢えず、張勲殿にも結構な量の書簡・竹簡を与えてはいるが、
まだまだ残っている

「全く……どれだけ放置していたんでしょうか」

だが、いまさらそのような事を言っても目の前の仕事が減る訳でもないので、さっさと片付けていく。うん、いろいろ学んでいて助かりました
そして、残った金十万、半分は遺族に何も無しというのは反感を買う恐れがあった。それにこちらの不手際で死なせてしまったのもあるので、そちらに廻した。残り半分は、国の再建のために使わせてもらうことにした。

それからは、特に滞りなく、国は着々と再建に向かっていった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6732t/

真・恋姫無双　袁の名を持つ武将

2011年10月2日10時57分発行